特44
789

東京圖書館

和書門	音楽類	函	二六架	三號	六二冊

國立國會図書館

生田敦盛

昭和三年度
帝國學士院
恩賜財團

寄法紙上人仕へ中去に
よりが人ゟ者出記
汁し志ゝ指は下向の時さ
うをれつ下に二歳てろりゐる男
ゑうゝ物をしさとゞ手おつゝ

生田敦盛

小さん幸小梅へ捨置くに上
人夜小思ひ量しうせ山海り
ひひく泣くうして給仕
ぞや十歳小四郎父母のお
きゝと歎信仰法
れなけゝと堅くうかゝ反

被為の中より者を女性の志
出我ゆゑ曲信ひそうにか
書くて一年一つ谷ゆく対面后
ひ敷望れ子にまり
出ばゆと吟ひ海ひく成
ゆ文の為代金給りを

かゝ義の山神へ三さゝ
ひたまふ一七日清浄の
早速まことに
義の明神へ参詣
かゝ義の明神
御祈願
社のあるむ垣神さびて
をもめる御手洗
頼むあり
孫の其面影を
ちゝ
あるまゝ
めくまに

絆ひきよりの浮名に我を
たゞ叶へ給へます妙
「霊かうさやけ勝眼のうちより
あらたなる霊夢を蒙りてハ
「何ぞ目出度やなお父美名ハ始
をはゞ浩然へ「何の御宝てん
ゆうらかりもあらたなるハ邑
はくび家城とも父をみんと思
ひぞ是より津の国生田の森を
下りてぞあらたなる霊夢を蒙りて
て候「是なる力つきし城のかくてハ
かぞへ思ひ合へは梅の有丈もなきハ

生田敦盛

ぬ、生田の森、沖津山、
やうくれて石立たる山陰の
ぬ、かへれば宮井と立出るに、
くらがりの山蔭や雪ふる
水瀬川ぬるを京めり。
夜たくりの時、
ぬ、たどりたどりと思
ひ津れ國の、生田の森よりこゆ
きりくす沖こゆほどふる是へ
ちやうの宮生田杜ぬてぬ。
高砂川の流れ、ぬ、ぬて京及たる
いや増く面白きら有ぬ。
ぬ、ぬ及ぬる所ぬ、生田杜ぬ

にくもやはらんと云寄添てやと
思ひ侍ることのり
早りの言くさいいひたあ死と
りしの歌れんてはさ人家
ゆくゆきたくぶ立うう宿代うう
たやと思ひ侍 シテサル 立福寺来れ

皆ゆ行ふりく年はけ者毛
きんぷ苦を守らうんい長月う
ひ屁とうしするきたる林風
晴ぶあうこそ物うう
「半セル
やあ 「すきやあ是ひる苦の
ここ
庫のうちかさる充ゆうる義

去れ甲冑を著し給へ
ぞいかりの成るやうん（テ）おろかれ
人者こころやすく。面々見を嘉
まを待ちとぞ武士対面の為ちう
まやたりかりたの敷
盛り綿重まりくくり（子上ヒル）おく敷

盛りに武士とぞ見えた
ちまちまり（上ヒ）祇ふまりたえた
うれ（元）ぐ。おくにたりる鳥の
あるまれうまりはとぞ紀
かりまる計まり。（元ト行）ぐまりとと
頼まぬ。ちれちうと提ふた

そよしきれ　かさんやおなされり
たきれあそしての花ちかすへ
こさあられもおもろへもつる宮
傳つ孩をたへる社あそまる緑
をいみ孝行の心ふりと故かへ
然の路行よ歩こそこびろよ

にありてこそ我父の海をみまくし
給へと猶お手も海神あられ
こればまし婿王作つたる
婿王行を取りはなしれいまもと
経るるつ親子の契りも今を
限りなるへし　ゆくゆく月花

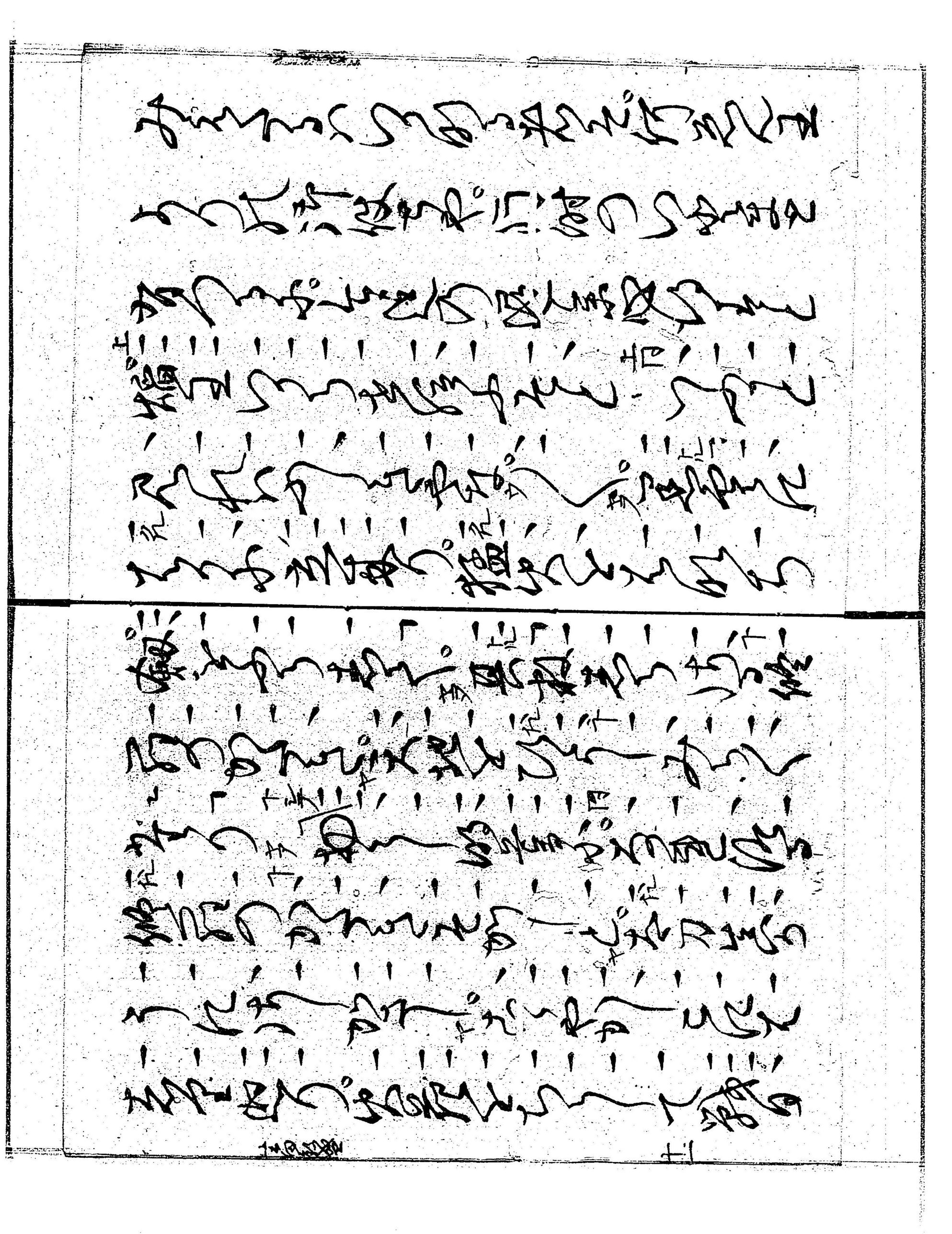
よしなきしらぬやからん
我らに平家の栄花を極め
詩花鳥風月にたづさはり管
絃の援にまじはるを遊びのみとて
にいかなる将のまんぱ本宮の
あり鯉たにかりぬ敵子

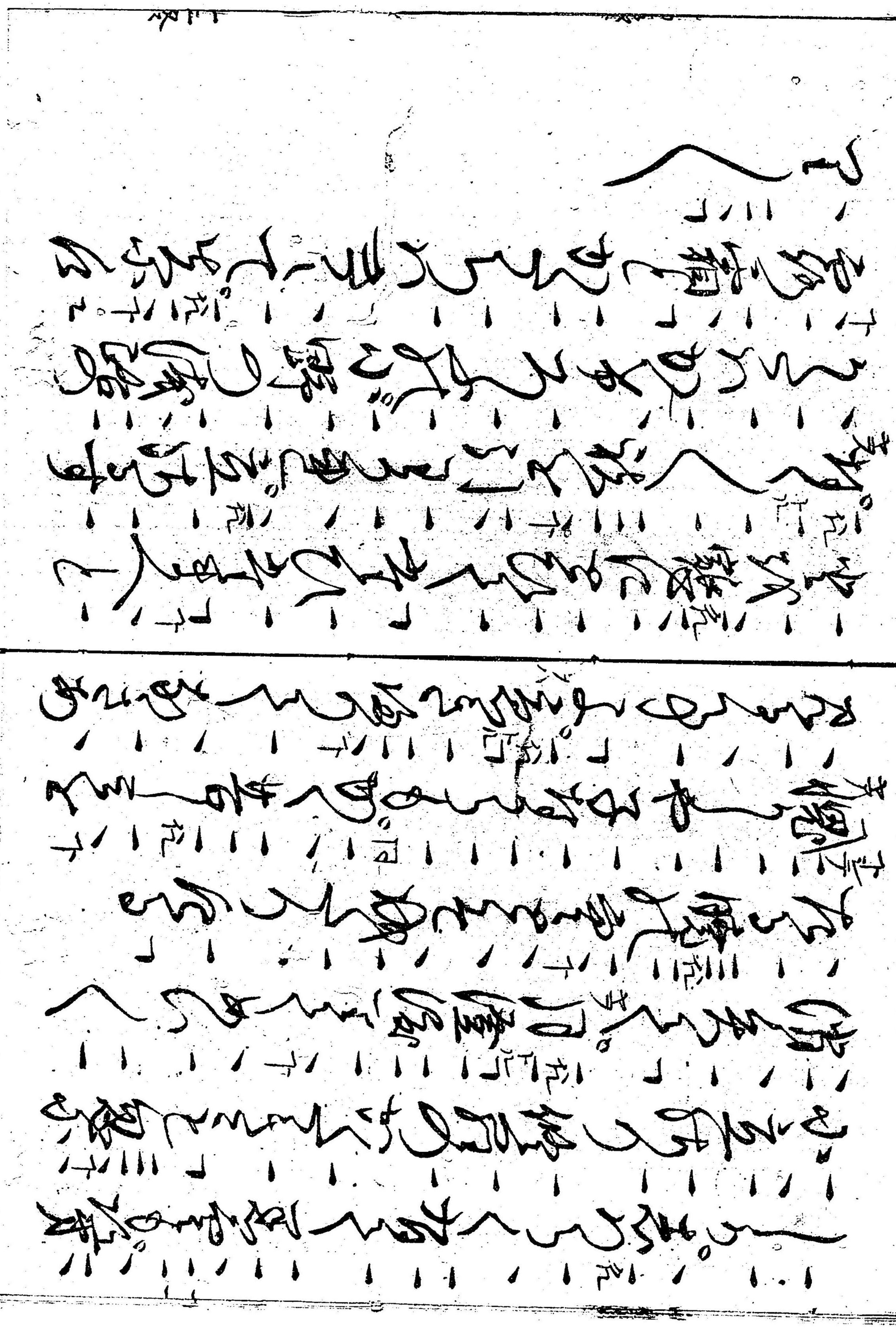
おもむくは玉の船より一門の人
ともしくしこの故を立てて西
海にさすらふ越えぬおもゐぬ旅の道
ある時は山どこへ海を行くのようす
いまさら都に行のおなうつ
しに文立ちちらう浪の瀬戸の山

治や一の谷は白旗まて見へしか
ごく敵を殺して一門の人
くとよろこひをし志打節
ま範頼義経その勝なりや
西国の海にほく戦ひ
へとも平家ハ運を極め弓やれや

なけきのとよしくと皆散々に
破れて各々落生田川の波を
捨て物語こそよかりける
うらやましれちぎりの假そめ
あまりおやてあはむの袖まきて
夕暮は枕をならべし那　あれに

十





右之本者觀世太夫章句真本令版行畢

正德六丙申歲弥生

示来荏苒数十年ニ星霜ヲ経ルニ従ヒ改正増補ヲ加ヘシモ印刷ニ附セサレハ之ヲ出ニ云ミスル能ハサルヲ悲ミ今般宮内省　御用達観世清孝ノ校合ヲ以テ新ニ之ヲ上梓スト云

明治十五年九月八日　出板御届

同　年十二月　刻成発兌

定價貳錢

出版人　京都府平民　檜常介
上京第三十組二条通寺町西入丁子屋町三十五番地